

日蓮大聖人御書全集

ほしなごろうたろうどのごへんじ

星名五郎太郎殿御返事

新版
2076
〜
2081

ほしなごろうたろうどのごへんじ

星名五郎太郎殿御返事

ぶんえい ねん

文永4年（'67）

がつ にち 12月5日

さい 46歳

ほしなごろうたろう 星名五郎太郎

かん めい よるゆめ

か じくににん しょうにんはじ

ちようあん

漢の明、夜夢みしより、迦・竺二人の聖人初めて長安の

扉 のぞ

このかた とう しんぶこうてい いた

てんじく

とぼそに臨みしより以来、唐の神武皇帝に至るまで、天竺の

ぶつぼうしんたん るふ

りよう よ ひやくさいこく せいめいおう

わ ちよう

仏法震旦に流布し、梁の代に百済国の聖明王より我が朝

にんのうさんじゆうだいきんめい

ぎよう ぶつぼうはじ

つた

このかた

の人王三十代欽明の御宇に仏法初めて伝う。それより已来、

いっさい きようろん

しよしゆう みなにちいき 満

さいわ

しょう

一切の経論・諸宗、皆日域にみてり。幸いなるかな、生

まつぼう う

りようぜん 聞

みみ い み へんど

を末法に受くといえども、靈山のきき、耳に入り、身は辺土

こ

たいが なが

たなごころ く

に居せりといえども、大河の流れ、掌に汲めり。

ただし、くわ たず み委しく尋ね見れば、ぶつぽう仏法において大小・権実・

ぜんご 趣前後のおもむきあり。もしこの義に迷いぬれば、ぎ まよ邪見に住

して、ぶつぽう なら仏法を習うといえども還つて十悪を犯し五逆を作る

つみ はなは罪よりも甚だしきなり。ここをもつて、よ いと どう ねが世を厭い道を願わ

ひと ぎ ぞんん人、まずこの義を存ずべし。れい か く がん び く とう例せば彼の苦岸比丘等のご

ゆえ だい き よう いとし。故に、大経に云わく「もし邪見なることあらんに、

み よう じ ゅう とき まさ あ び ご く お命終の時、正に阿鼻獄に墮つべし」と云えり。い

と なに問う。何をもつてか邪見の失を知らん。じゃけん とが し予、不肖の身た

ずいぶん ごせ おそ ぶつぽう もと おも ねがりといえども、随分、後世を畏れ、仏法を求めんと思う。願

わくはこの義ぎを知らん。もし邪見じやけんに住せば、ひるがえして翻

しようけん

赴

正見におもむかん。

こた

ぼんげん

さだ

せんち

あき

答う。凡眼をもつて定むべきにあらず。浅智をもつて明ら

きようもん

まなこ

ぶつち

さき

むべきにあらず。經文をもつて眼とし、仏智をもつて先と

おそ

ぎあ

さだ

怒

せん。ただ恐らくは、もしこの義を明かさば、定めていかり

いきどお

ふく

ぶつちよく

をなし、憤りを含まんことを。さもあらばあれ、仏勅を

おも

せにん

みな

とお

たつと

ちか

重んぜんにはしかず。それ、世人は皆、遠きを貴み、近き

卑

ぐしや

おこな

ひ

とお

をいやしむ。ただ愚者の行いなり。それ、もし非ならば遠

は

り

ちか

す

くとも破すべし。それ、もし理ならば近くとも捨つべから

ひとたつと

ひ

なん

いまもち

ず。人貴むとも、非ならば何ぞ今用いん。

つた

き

か

なんさんほくしち

じゅうりゆう

かくしや

いとく

すぐ

伝え聞く、彼の南三北七の十流の学者、威徳ことに勝れ

てんか

そんちよう

すで

ごひやくよねん

あ

て天下に尊重せられしこと、既に五百余年まで有りしかど

ちん

ずいにだい

ころ

てんだいだいし

み

じゃぎ

は

も、陳・隋二代の比、天台大師これを見て邪義なりと破す。

てんか

き

おお

憎

天下にこのことを聞いて、大きにこれをにくむ。しかりと

ちんおう

ずいてい

けんおう

か

しよしゆう

てんだい

いえども、陳王・隋帝の賢王たるによつて、彼の諸宗に天台

め

けつ

じゃしよう

明

さきごひやくねん

じゃぎ

あらた

を召し決せられ、邪正をあきらめて前五百年の邪義を改

みな

だいし

き

わ

ちよう

えいざん

こんぽん

め、皆ことごとく大師に帰す。また、我が朝の叡山の根本

だいし

なんと

ほつきよう

せきがく

ろん

ぶつぼう

じゃしよう

糾

大師は、南都・北京の碩学と論じて仏法の邪正をただす

こと、皆、みな きょうもん 經文をさきとせり。先

今、いま どうせい どうぞく きせん みな ひと 崇 ほう もち こころ 当世の道俗・貴賤、皆、人をあがめて法を用いず、心

し きょう 依 を師として經によらず。これによつて、あるいは念仏・

ごんきよう だいじようみようてん 投 捨 しんごん じゃぎ 権教をもつて大乘妙典をなげすて、あるいは真言の邪義

いちじつ しようほう ぼう たぐ だいじようひぼう をもつて一実の正法を謗ず。これらの類い、あに大乘誹謗

輩 のやからにあらずや。もし經文のごとくならば、いかでか

ならく くる う なが 汲 那落の苦しみを受けざらんや。これによつて、その流れをく

ひと む人もかくのごとくなるべし。

うたが い ねんぶつ しんごん ごん 疑つて云わく、「念仏・真言は、これ、あるいは権、あ

じゃぎ

ぎようじゃ

じゃけん

ほうぼう

るいは邪義。また行者、あるいは邪見、あるいは謗法なり」

ふしん

ゆえ

こうぼうだいし

と、このこと、はなはだもつて不審なり。その故は、弘法大師

こんごうきつた

けげん

だいさんじ

ぼさつ

しんごん

は、これ金剛薩埵の化現、第三地の菩薩なり。真言は、こ

さいごくじんじん

ひみつ

ぜんどうおしょう

さいど

きようしゆ

みだ

れ最極甚深の秘密なり。また、善導和尚は西土の教主・弥陀

によらい

けしん

ほうねんしようにん

だいせいしほさつ

けしん

如来の化身なり、法然上人は大勢至菩薩の化身なり。かく

しようにん

じゃけん

ひと

い

のごときの上人を、あに邪見の人と云うべきや。

こた

い

もと

わたくし

ことば

答えて云わく、このこと本より私の語をもつてこれを

なん

きようもん

さき

糾

難ずべからず。経文を先としてこれをただすべきなり。

しんごん

おし

さいごく

ひみつ

さんぶきよう

なか

真言の教えは最極の秘密なりというは、三部経の中におい

そしつじきよう

おう

み

まった

もろもろ

によらい

て蘇悉地経をもつて王とすと見えたり。全く諸の如来の

ほう なか

だいいち

み

ぶつぼう

法の中において第一なりということを見ず。およそ仏法と

ぜんあく

ひと

選

みなほとけ

さいだいいち

いうは、善悪の人をえらばず、皆仏になすをもつて最第一

さだ

ほど

ことわり

ひと

し

に定むべし。これ程の理をば、いかなる人なりとも知る

ぎ

よ

きよう

きよう

あ

べきことなり。もしこの義に依らば、経と経とを合わせ

こう

いま

ほけきよう

にじようじようぶつ

しんごんきよう

てこれを按すべし。今、法華経には二乗成仏あり、真言経

な

嫌

にはこれ無し。あまつさえ、あながちにこれをきらえり。

ほけきよう

にょにんじようぶつ

あ

しんごんきよう

法華経には女人成仏これ有り。真言経にはすべてこれな

ほけきよう

あくにんじようぶつ

あ

しんごんきよう

まった

し。法華経には悪人成仏これ有り。真言経には全くなし。

なに

ほけきよう

すぐ

い

何をもつてか法華經に勝れたりと云うべき。また、もしそ

ずいそう

ろん

ほつけ

ろくずい

うけ

じどう

の瑞相を論ぜば、法華には六瑞あり。いわゆる、雨華・地動

びやくうそう

ひかり

かみ

うちよう

きわ

しも

あびごく

て

し、白毫相の光、上は有頂を極め下は阿鼻獄を照らせる、

たほう

とう

だいち

い

ふんじん

しよぶつ

これなり。また、多宝の塔、大地より出でて、分身の諸仏、

じつぼう

きた

じようぎようとう

ぼさつ

十方より来る。しかのみならず、上行等の菩薩の

ろくまんごうしゃ

ごまん

しまん

さんまん

ないしいちごうしゃ

はんごうしゃとう

だいち

六万恒沙・五万・四万・三万、乃至一恒沙・半恒沙等、大地

涌

出

いぎふしぎ

ろん

なに

よりわきいでしこと、この威儀不思議を論ぜば、何をもつ

しんこんほつけ

勝

い

くわ

述

て真言法華にまされりと云わん。これらのこと、委しくのぶ

暇

たいかい

いってき

い

るにいとまあらず。わずかに大海の一滴を出だす。

ぼだいしんろん

いつかん

ふみ

りゆうみようぼさつ

ぞう

ここに菩提心論という一卷の文あり。竜猛菩薩の造と

ごう

しよ

い

しんごん

ほう

なか

そくしんじようぶつ

号す。この書に云わく「ただ真言の法の中にのみ即身成仏

ゆえ

さんまじ

ほう

と

しよきよう

なか

か

す。故に、これ三摩地の法を説く。諸教の中において闕い

か

い

ことば

おお

ふしん

てしかも書かず」と云えり。この語は大いに不審なるによ

きようもん

つ

み

そくしんじようぶつ

ことば

あ

って、經文に就いてこれを見るに、即身成仏の語は有れ

そくしんじようぶつ

ひとまった

ほけきよう

ども、即身成仏の人全くなし。たといありとも、法華經の

なか

そくしんじようぶつ

しよきよう

なか

闕

書

中に即身成仏あらば、「諸教の中においてかいてしかもか

い

ふか

かず」と云うべからず。このこと、はなはだもつて不可な

しよ

まった

りゆうみよう

さく

くわ

むね

り。ただし、この書は全く竜猛の作にあらず。委しき旨

べつ

あ

りゆうみようぼさつ

ぞう

誤

は別に有るべし。たとい竜猛菩薩の造なりとも、あやまり

ゆえ

だいろん

いちだい

述

かんよう

はんにや

ひみつ

なり。故に、大論に、一代をのぶる肝要として、「般若は秘密

にじようさぶつ

ほつけ

ひみつ

にじようさぶつ

にあらず、二乗作仏なし。法華はこれ秘密なり、二乗作仏あ

い

い

にじようさぶつ

ひみつ

り」と云えり。また云わく「二乗作仏あるはこれ秘密、

にじようさぶつ

けんきよう

い

ぼだいしんろん

ことば

二乗作仏なきはこれ顕教」と云えり。もし菩提心論の語の

べつ

りゆうじゆ

だいろん

背

そう

ごとくならば、別しては竜樹の大論にそむき、総じては

しよぶつしゆつせ

ほんい

いちだいじ

いんねん

破

いま

諸仏出世の本意、一大事の因縁をやぶるにあらずや。今、

りゆうじゆ

てんじんとう

みな

しやくそん

せつきよう

ひろ

よ

竜樹・天親等は、皆、釈尊の説教を弘めんがために世に

い

ふほうぞうにじゆうしにん

ひと

なん

出ず。付法蔵二十四人のその一りなり。何ぞかくのごとき

もうせつ

か しんごん

はんにやきよう

おと

妄説をなさんや。彼の真言はこれ般若経にも劣れり。いか

ほつけ なら

こうぼう ひぼうほうやく

にいわんや法華に並べんや。しかるに、弘法の秘蔵宝鑰に、

しんごん いちだい せつ

ほつけ だいさんばん くだ

真言に一代を撰ずるとして法華を第三番に下し、あまつさ

けろん

い つつし ほけきよう ひら

もろもろ

え戯論なりと云えり。謹んで法華経を披きたるに、「諸の

によらい しよせつ

なか だいいち

い いこんとう さんせつ

如来の所説の中に第一なり」と云えり。また「已今当の三説

すぐ

み

やくおう じゅうゆ なか ほつけ

に勝れたり」と見えたり。また、薬王の十喩の中に、法華を

たいかい 譬

にちりん

しゅみせん

大海にたとえ、日輪にたとえ、須弥山にたとえたり。もし

ぎ よ

ふか

なん うみ 過

あき

この義に依らば、深きこと何ぞ海にすぎん。明らかなるこ

なん

にちりん すぐ

たか

なん しゅみせん こ

あ

と何ぞ日輪に勝れん。高きこと何ぞ須弥山に越ゆること有

たと

らん。喩えをもつて知んぬべし、何をもつてか法華に勝れ

なに

ほっけ　すぐ

い

だいにちきようとう

まった

ぎ

おの　けん

たりと云わんや。大日経等に全くこの義なし。ただ己が見

まか

なが

ぶつ　い

そむ

に任せて永く仏意に背く。

みようらくだいしい

こ

まなこあ

もの

いしつ

たず

妙楽大師曰わく「請う、眼有らん者は委悉にこれを尋ね

い

ほけきよう

さ

けこん

おと

い

よ」と云えり。法華経を指して華嚴に劣れりと云うは、あ

まなこ　抜

に眼ぬけたるものにあらずや。また大経に云わく「もし

ほとけ

しょうほう

ひぼう

もの

まさ

した

た

仏の正法を誹謗する者あらん、正にその舌を断つべし」

ひぼう

した

せぜ

もの　い

じゃけん

と。ああ、誹謗の舌は世々において物云うことなく、邪見の

まなこ

しょうじよう

抜

み

眼は生々にぬけて見ることなからん。しかのみならず、

ひとしん

きよう

きぼう

ないし

ひと

「もし人信ぜずして、この経を毀謗せば乃至その人は

みようじゆう

あびごく

い

もん

さだ

命終して、阿鼻獄に入らん」の文のごとくならば、定め

むけんだいじよう

お

むりようおつこう

苦

う

ぜんどう

て無間大城に堕ちて無量億劫のくるしみを受けん。善導・

ほうねん

れい

し

たれ

ちえあ

ひと

法然も、これに例して知んぬべし。誰か智慧有らん人、こ

ほうぼう

なが

く

とも

あび

ほのお

焼

ぎようじやよ

の謗法の流れを汲んで共に阿鼻の焰にやかれん。行者能

おそ

だいじやけん

やから

によらいじようたい

く畏るべし。これはこれ大邪見の輩なり。ゆえに如来誠諦

きんげん

あん

い

わ

しやうほう

壊

たと

の金言を按ずるに云わく「我が正法をやぶらんことは、譬

りようし

み

けさ

懸

えば獬師の身に袈裟をかけたるがごとし。あるいは

しゆだおん

しだごん

あなごん

あらかん

しやくしぶつ

ほとけ

しきしん

須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢・辟支仏、および仏の色身

げん わ しょうほう やぶ
を現じて我が正法を壊らん」といえり。

いま ぜんどう ほうねんとう しゅじゅ い げん ぐち どうぞく
今、この善導・法然等は、種々の威を現じて愚癡の道俗を

誑 によらい しょうほう ほろ か しんごん
たぶらかし、如来の正法を滅ぼす。なかんずく、彼の真言

とう なが げんざい むね ちくるい
等の流れ、ひとえに現在をもつて旨とす。いわゆる、畜類を

ほんぞん なんによ あいほう いの しょうえんとう のぞ 祈
本尊として男女の愛法を祈り莊園等の望みをいのる。かく

しょうぶん 験 きどく
のごとき少分のしるしをもつて奇特とす。もしこれをもつ

すぐ か がっし げどうとう 過 か
て勝れたりといわば、彼の月氏の外道等にはすぎじ。彼の

あか たせんになん じゅうにねん あいだ ごうが みず みみ 湛
阿竭多仙人は、十二年の間、恒河の水を耳にたたえたりき。

ぎぬ せんになん しだいかい いちにち うち 吸 干 くる げどう
また耆菟仙人の四大海を一日の中にすいほし、拘留外道は

はつぴやくねん あいだいし

過

八百年の間石となる。あにこれにすぎたらんや。また、瞿

どんせんになん じゆうにねん

しやくしん

な

せつぼう

こうぼう

せつな

曇仙人が十二年のほど釈身と成り説法せし、弘法が刹那の

毘盧遮那

み

な

いとく

ろん

ほどにびるさなの身と成りし、その威徳を論ぜば、いかん。

か へんげ

験

しん

すなわ

げどう

しん

まさ

もし彼の変化のしるしを信ぜば、即ち外道を信ずべし。当

し

かれいとく

あび

ほのお

に知るべし、彼威徳ありといえども、なお阿鼻の炎を

免

へんげ

まぬかれず。いわんや、わずかの変化においてをや。いわ

だいじようひぼう

いつさいしゆじよう

あくちしき

んや、大乘誹謗においてをや。これ一切衆生の悪知識な

ちかづ

おそ

おそ

り。近付くべからず。畏るべし、畏るべし。

ほとけのたま

あくぞうとう

おそ

こころ

あくちしき

仏曰わく「悪象等においては畏るる心なかれ。悪知識

においておそは畏るる心こころをなせ。何をもつての故ゆえに。悪象あくぞうはた

だ身みをやぶり、意いをやぶらず。悪知識あくちしきは二つ共にふたやぶる故とも

に。この悪象等あくぞうとうはただ一身いつしんをやぶる。悪知識あくちしきは無量の身むりよう、

無量の意むりようをやぶる。悪象等あくぞうとうはただ不浄ふじようの臭き身くさをやぶる。

悪知識あくちしきは淨身じようしんおよび淨心じようしんをやぶる。悪象あくぞうはただ肉身にくしんをや

ぶる。悪知識あくちしきは法身ほっしんをやぶる。悪象あくぞうのため殺にころされては三さん

悪あくに至らず。悪知識いたのため殺に殺されたるは必ず三悪かならに至る。悪知識さんあくは善法いたのため

この悪象あくぞうはただ身みのため怨にあだなり。悪知識あくちしきは善法ぜんぽうのため

にあだなり」と。故ゆえに畏るべきは、大毒蛇・悪鬼神おそよりも、

こうぼう ぜんどう ほうねんとう なが あくちしき おそ りやく じゃけん
弘法・善導・法然等の流れの悪知識を畏るべし。略して邪見
の失を明かすこと畢わんぬ。
とが あ お

つか いそ そうろう 取 合 様
この使いあまりに急ぎ候ほどに、とりあえぬさまに、

片 端

もう そうろう

のち

びんぎ くわ

かたはしばかりを申し候。この後、また便宜に委しく

きようしやく

みしら

書

そうろう

経釈を見調べてかくべく候。あなかしこ、あなかしこ。

げけん

そうろう

いのち

そうら

おお

外見あるべからず候。もし命つれなく候わば、仰せの

みようねん

あきくだ

そうら

もう

そうろう

きようきよう

ごとく明年の秋下り候いて、かつ申すべく候。恐々

きんげん

謹言。

じゆうにがついつか

十二月五日

にちれん

日蓮

かおう

花押

ほしなごろうたろうどのごへんじ
星名五郎太郎殿御返事